

最近の本から

津 守 真

最近、私が、感銘深く読んだ本の中から、おこがましいけれども、感想をのべて紹介したい。

その一冊は、鈴木とく著「感傷はいく野迷いあるき」(全国社会福祉協議会、昭50)である。鈴木とく氏は、保育所の保母として長年現場で子どもたちとはたらいでこられた方であるが、東京の下町の戦前の託児所の実態を背景に、保育者としてそこで取り組んでこられた体験をもとに書かれた自伝である。実際に生きた体験をそのままに思い起そうとし、そのことの意味を、現在もう一度問い直そうとしておられる。それが壮年期のほとんど全体を蔽うような長い期間にわたっているものであるとき、(ここではその最初の部分であるが)読む者にとっては、限りのある人間の一生を土台にしたものであることを思い出させられて、ひとごとでなく、一しょに迷い歩きをさせられてしまう。著者は序文で、「私には、保育の目的がほんとうにあったのだろうか」と自問される。むしろ、「行きあたりばったりの、歩き方といったほうが適切かと思う」といわれながら、全編を貫いているものは、本

当の保育を求めて歩いておられる保育者の姿のように私には思われた。「さまざまな生活指導が、主軸であったような私の保育の、反対側では自然からの情感を、いつも考えていたように思う」といわれる、この二つのテーマが繰返しあらわれる。著者は、この迷い歩きの中で、挫折しきずれおれそうになるとき、「私の気持に『さあ!』と意志する何かをもたらしにくれたのは、子どもたちの、あの、さ青な瞳と、透きとおる声と、それにも増して生命の息吹きだった」(P・5)といわれるのは、今もそこを出発点として考えておられるのである。「どの子どもにも、その顔が異なるように、ちがう気持が宿っている」。その気持を察してやりたいと思っても、「なかなかしっくりいかなかったり、それより先に、吾が願ひだけが、あらわに子どもに向けられたりする」(P・7)

「保母という職業意識を持つことは大切なことだが、それに縛られてしまうと、自分は何とも思っていないのだが、相手を、その意識で縛ってしまうことが多い。」「この二つのことを、いつも大切に、常に反問的に自分に問いかけていたいと思う。」と述べられる。これは、続いて記してゆかれる帝

大セツルメント、浅草玉姫方面館、高橋方面館での地域社会の問題をかかえる中で、保育の中に流れている若者の保育者精神である。貧しい地域の託児所の裏庭の陽だまりで、数人の子どもたちと腰をおろして子どもとしゃべりながら何かをしている写真（P・41）は、この本を象徴するものの一つであらう。

若い保育者に対して、それと同じ体験を経て、更に大きな眼でその体験を見直している者として、温い思いやりをもって、陥りやすいあやまちを指摘してあるところが各処にある。それができるのは、つまるところ、それを自分自身の反省としてとらえておられるからであらう。ある時期の自分の保育を、枠はめ、保育もいいところだと述べ、「その当時は、せっかちにこうなってくれあななってくれと望んではないなかつたにしろ、仕事に熱を入れると、せっかちになる」（P・27）と指摘される。年少組二五人を一人で食事の面倒を見ることの大変さを述べ、「全体の統制がいつも、この小さな子どもたちに破られてしまい、他の子どもに落着かないものを感じさせる」という当時の手記を引用して、「今の若い人も私の若い時も、若い時はなぜ、全体の統制だけが気になった

のだらう」（P・46）と指摘される。そして、「私など、やたらに統制したくないという考えにたどりついたのは、随分とあとのことである」と控えめに、自分のたどりついたところを述べられる。

私は、もう十年以上も前に、著者が園長をしておられた保育園に見学に行ったことがあった。（それはこの本の時代からは、ずっと後のことであるが）園長であった著者が担任の保育さんに、えのぐをもつと濃くときなさいと歯切れよくいって、しかもそこには温かい自由な雰囲気漂っていたことを印象深く覚えている。そして、この本の中で、「詩を失うことは悲しいことだ、私は子どもたちといながら、詩を喪いかけている。……託児所は楽しい所でなければ……。毎日彼らは家で叱られている。遊び、その中でいろいろな訓練ができないで、子どもがさわいだり、いわれたことを守れないと叱ったところでどうなるだらう。あしたこそは、楽しい一日を、どなったり叱りつけたりしない一日を過したいと思う。」（P・284）というような文章に出会ったとき（こういう個処がたくさんある）、あのときの保育の底力になっていたものを、この本の中であらためて見せて頂いたように思う。